

复合动词前项「押し-」的语义虚实考

复旦大学 外国语言文学学院 杨晓敏

[摘要] 针对以往研究对复合动词前项「押し-」的描述不足,本文借助核心图式理论重新梳理了「押す」的主要语义,并探讨了「押し-」语义中的“虚”和“实”,指出:当后项为表致使变化的有对他动词时,「押し-」保留[+对他][+施力][+致使变化],为实义;当后项为表致使变化的有对他动词、但复合动词整体语义抽象化时,「押し-」呈现为[+对他][+施抽象力][+致使变化],实义大于虚义;当后项为无对他动词、不表作用的他动词或自动词时,「押し-」语义虚化;最后,本论文重新审视了「押し+表主体移动的自动词」,认为此时「押し-」继承「押す」作为自动词使用时的语义图式,并呼吁学界对此类复合动词构成要素进行重新定位。

[关键词] 押し- 语义虚实 核心图式 焦点转换

引言

日语复合动词数量众多,是日语学习的一大难点。难以理解、不会使用复合动词是日语学习者的普遍问题,也成为学习者用词稚嫩、表达单一的主要原因。而日语复合动词一直以来也受到研究者的关注,其中不乏针对复合动词种类、前后项结合条件等的研究(如寺村(1982)、石井(1983)、影山(1993)、松本(1998)等)、针对前后项语义关系的研究(如森田(1978)、何志明(2010)等)、针对后项动词多义性的研究(如姬野(1999)、杉村(2008)等)、以及针对学习者习得状况的研究(如松田(2004)、陈曦(2008;2012)、玉冈贺津雄,初相娟(2013)等)。虽然日语复合动词研究取得累累成果,但不得不承认,大家依然较少探讨复合动词前项的语义虚化问题。

据杨晓敏(2009)的统计,复合动词前项生产性最高的前十位依次为「見-」「取り-」「言い-」「引き-」「打ち-」「押し-」「差し-」「書き-」「思い-」「切

り-」^[1],其中「取り-」「打ち-」「押し-」「差し-」在部分复合动词中呈现出语义虚化的倾向。以「押し-」为例:

- (1) 階段のほうへ引き返し、鉄製の扉を押し開いた。
(天童荒太『永遠の仔』)
- (2) 遠く of 山から、夥しい量の濁流が押し寄せてくるのだった。
(中野美代子『契丹伝奇集』)

(1)的「押し開く」义为“推开”,「押し-」表示“推”,保留实质性动词语义;(2)的「押し寄せる」义为“涌来”,语义接近「寄せる」。针对这样的「押し-」,『広辞苑』(岩波書店,第五版電子版)的解释如下:

[接頭] (他の動詞の上に付いて接頭語となる)ア、「むりに」「しいて」の意。徒然草「はては許さぬものども一し取りて」イ、語調を強める。「-いただく」

『学研国語大辞典』(学習研究社,1990)则针

对每个复合动词进行了较细致的说明。

押し包む: <他五> {「押し」は強めの接頭語} くるむ。

押しつぶす: <他五> ①おしてつぶす。

② {「押し」は強めの接頭語} 「つぶす」を強めていう語。

③ [巨大な力や勢力などで] 力を失わせる。

然而站在日语学习者的角度, 诸多问题依然没有解决, 如: 「押しー」的语义和「押す」有何关联? 「押しー」何时语义虚化为「接頭語」(“前缀”)? 「押しー」语义的虚实是否有一定规律可循? 本文将针对这些问题进行探讨。

1 他动性和谐的原则 和 主语一致的原则 及其局限性

针对复合动词前后项的结合条件, 影山(1993)将复合动词分为“句法性复合动词”和“词汇性复合动词”, 并针对“词汇性复合动词”提出“他动性和谐的原则”, 认为前后项动词在是否含有外项这一点上需保持一致, 否则复合动词难以成立, 如表1所示。

表1 影山(1993)提出的“他动性和谐的原则”

后项 前项	他动词 x<y>	非作格动词 x<>	非宾格动词 <y>
他动词 x<y>	○洗い落とす	○探し回る	×洗い落ちる
非作格动词 x<>	○泣きはらす	○飛び降りる	×走り転ぶ
非宾格动词 <y>	×売れ飛ばす	×痛み泣く	○流れ着く

注: 本文按日语习惯将“及物动词”称作“他动词”, 将“不及物动词”称作“自动词”。

然而, 日语中既有「死に絶える」(非宾格动词+非宾格动词), 还有「死に別れる」(非宾格动词+非作格动词), 因此由本(1996)、松本(1998)提出“主语一致的原则”, 认为复合动词前后项主语需保持一致。

再看例(2)中的「押し寄せる」, 从是否包含外

项的角度看, 「押し寄せる」为“他动词+非宾格动词”, 从主语角度看, 前后主语并不一致, 因此“他动性和谐的原则”和“主语一致的原则”都无法解释它的成立, 而影山(1993)也承认「掻きー」「差しー」「押しー」「取りー」等前项游离于“他动性和谐的原则”^[2]。

那么这些前项的词特殊在哪里? 我们发现, “他动性和谐的原则”和“主语一致的原则”强调动词的句法特征, 而较少关注动词的语义变化。因此, 当复合动词前后项保留动词语义时, 这两个原则基本奏效, 而当前后项中某项或两项开始丧失动词的原有语义时, 这两个原则便显现出它们的局限性。

因此, 要弥补这样的局限性, 便不可避免地需要将动词多义性纳入视野。影山(2013)将词汇性复合动词分为「主題関係複合動詞」和「アスペクト複合動詞」, 其核心思想就是考虑动词的语义。众所周知, 正如 Lakoff (1987)、Brugman (1988)、初山 (2002)等指出, “意象图式 (image schema)”理论对多义词具有强大的释义功能, 也有效地解释了多义词各义项间的演变轨迹。然而研究者对“意象图式”的见解存在差异, 比如 Brugman、Lakoff 等认为多义词的各项语义应归纳为多个意象图式; 而 Langacker、田中、国广等则认为存在一个能涵盖所有语义的共同图式, Langacker (1991)称之为“super schema”, 田中 (1990)称之为「コア図式」(“核心图式”), 国广 (1994)称之为「現象素」(“现象素”)。田中 (1990)利用「コア図式」(“核心图式”)分析了多义英语动词, 松田 (2004)利用「コア図式」(“核心图式”)有效地探究了复合动词后项「-込む」的多义性, 杨晓敏 (2016)则运用“核心图式”对「取りー」进行了探讨。

借助核心图式理论开展复合动词前项研究的成果不多, 松本 (2006)将「取る」的语义归纳为六种图式, 并指出加强对「取る」核心图式的理解将直接有助于学习者对「取りー」的理解和使用。杨晓敏 (2016)则在极力简化图式的基础上, 结合后项的语义特征, 明确了「取りー」的语义虚化过程。本文延续杨晓敏 (2008; 2016)的研究模式, 对「押しー」语义中的“虚”与“实”进行观察。

2 核心图式理论下动词「押す」的语义再分析

首先,我们来梳理动词「押す」的语义。词典对「押す」的解释大体一致,如『日本語基本動詞用法辞典』^[3]中如下解释:

- 1)動かそうとして手前から向こうへ力を加える。
- 2)物や体の一部に力を加える。
- 3)印鑑などで印を付けるために力を加える。
- 4)戦い・ゲーム・試合などで相手を圧倒している。
- 5)無理を承知で何かをする。

『日本語多義語学習辞典 動詞編』^[4]将「押す」的语义归纳为下图1。

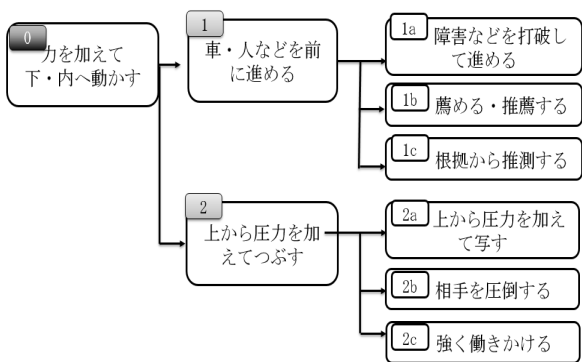


图1 「押す」的多义性

但词典间也存在差异,如『明鏡国語辞典』(電子版)单独列出「押す」的自动词用法:

- ⑥〔自動詞的に〕そのままの状態でも物事を進める。行く。「この方針で押す」「強気で押す」「値上げ反対で押す」

基于上述词典的解释,我们将动词「押す」的核心图式归纳为“动作主体向对象施力,使其由原属空间移动至新属空间”。如图2所示(基于简化图式的立场,图中以横向右指作用力代表作用力,以下同)。

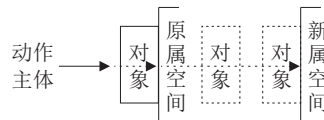


图2 「押す」的核心图式

按照核心图式理论的观点,基于核心图式中不同部位的焦点转换,「押す」的多义性得以实现。首先,当动作主体、对象、作用力、移动、新属空间得到焦点化时,「押す」的图式为图3。

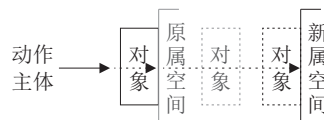


图3 动作主体、对象、作用力、移动、新属空间得到焦点化

此时「押す」表示“推到”义,采取<動作主が対象を場所に>的语义结构,「太郎が次郎を壁に押す」是其用例。随着物理领域向社会领域扩张,“推到”义基于隐喻产生“推荐”义(如「みんながA君をクラス委員におす」),但此时「おす」多写作汉字「推す」。

其次,动作主体、对象、作用力、移动得到焦点化时,图式变化为图4。

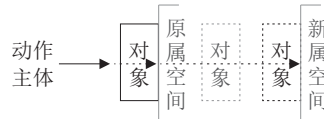


图4 动作主体、对象、作用力、移动得到焦点化

此时「押す」表示“推”义,采取<動作主が対象を>的语义结构,「車椅子を押す」是其典型例子。随着物理领域向心理领域扩张,“推”义基于隐喻产生“推测”义(如「種々の事情からおして考える」)。但“推测”义下的「おす」也多写作汉字「推す」。

再次,当动作主体、对象、作用力得到焦点化时,图式变化为下页图5。

此时「押す」表示“按、压”义,也采取<動作主が対象を>的语义结构,「スイッチを押す」是典

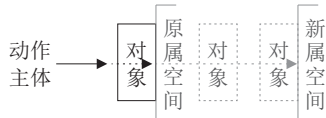


图5 动作主体、对象、作用力得到焦点化

型用例。随着物理领域向社会领域扩张,“按、压”义基于隐喻产生“压制”义(如「相手に押される」),随着物理领域向心理领域扩张,“按、压”义基于隐喻产生“压住、克服”义(如「病気を押し出席する」)。用“按、压”这一一般化的动作来特指“捺印”,可认为是提喻的作用,因此基于提喻产生“捺印”义。

最后,当动作主体、作用力得到焦点化时,图式变化图6。

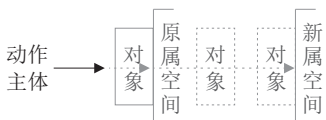


图6 动作主体、作用力得到焦点化

此时「押す」表示“强力”义,采取<動作主が>的语义结构,如「この方針で押す」「強気で押す」所示,「押す」不再支配<対象を>,呈现出自动词的特征,且动词所描述的多为抽象事态,因此可认为“强力”义是焦点转换和隐喻共同作用的结果。综上所述,「押す」的主要语义网络可表示如图7。

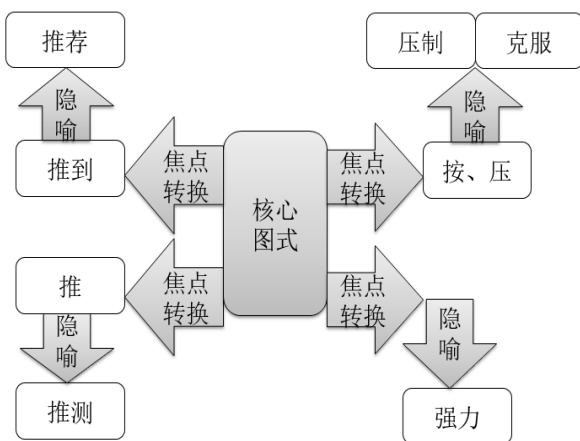


图7 「押す」的主要语义网络

3 复合动词前项「押し」语义的虚与实

3.1 保留实质性动词语义的「押し」

再看复合动词中「押し」的语义。影山(1993)指出:表示“开始”的「一かける」「一だす」「一始める」、表示“持续”的「一まくる」「一続ける」、表示“完成”的「一終える」「一終る」「一尽くす」「一きる」「通す」「一抜く」、表示“未遂”的「一そこなう」「一損じる」「一そびれる」「一かねる」「一遅れる」「一忘れる」「一残す」「一誤る」「一あぐねる」、表示“过度”的「一過ぎる」、表示“再试行”的「直す」、表示“习惯”的「つける」「一慣れる」「飽きる」、表示“相互行为”的「一合う」和表示“可能”的「一得る」与前项构成句法性复合动词。与「打ち一」「取り一」相同,在句法性复合动词中,「押し」是复合动词的主要部分,理论上可保留「押す」的各项语义。

而在词汇性复合动词中,当「押し」与语义结构为<動作主が対象を場所に>的后项动词(如「当てる」)结合,组合成语义结构为<動作主が対象を場所に>的复合动词时,复合动词呈现出和上页图3相同的图式(见图8)。

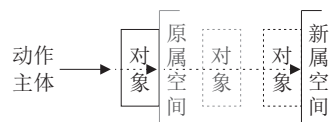


图8 复合动词「押し当てる」的图式

在这样的动词中,「押し」多表示“按、压”义,当<場所>为一个较封闭空间时,“按、压”义可引申为“塞”义,如:

(3) 千円札を二枚、山下の手に押しつけておいて、彼女は先に店の外に出た。

(森瑤子『あなたに電話』)

(4) りんは新しい薬草を傷口に押しあてると、エンゾに上体を起こさせて、腹に包帯を巻きはじめた。

(坂東真砂子『桃色浄土』)

(3)的「押しつける」义为“塞到”，(4)的「押しあてる」义为“压到”。类似的例子还有：

- (5)a. 綿を袋に押し詰める<塞进>
- b. 引き入れにタオルを押し入れる<塞进>
- c. 銃に弾丸を押し込める<塞进>

当「押しー」与语义结构为<動作主が対象を>且带有位置移动语义的后项动词(如「開ける」)结合,组合成语义结构为<動作主が対象を>且带有位置移动语义的复合动词时,复合动词呈现出和图4相同的图式(见图9)。

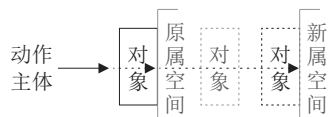


图9 复合动词「押し開ける」的图式

此时「押しー」最常见的是表示具体动作的“推”义,如:

- (6) クリスマスが仮眠室の扉を押しあげ、「喝っ!」と、怒鳴る。
(倉世春『姫将軍と黄金の王子』)

「押し開ける」义为“推开”，「押しー」表示“推”。当动作主体由人扩张为洪水等无生命物时，“推”义可引申为“冲”义，以下a-h中「押しー」表示“推”，i中「押しー」表示“冲”。

- (7) a. 機体を押し上げる<推上去>
 - b. 扉を押し開く<推开>
 - c. 人を押し倒す<推倒>
 - d. 車を押し進める<推着前进>
 - e. 群衆を押し戻す<推回去>
 - f. ボールを押し返す<推回去>
 - g. 肘で人を押しのける<推开>
 - h. 人々を押し分ける<推开>
 - i. 洪水が芝生を押し流す<冲走>
- 当「押しー」与语义结构为<動作主が対象

を>且带有状态变化语义的后项动词(如「潰す」)结合,组合成语义结构为<動作主が対象を>且带有状态变化语义的复合动词时,复合动词呈现出和上页图5相同的图式(见图10)。

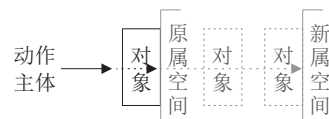


图10 复合动词「押し潰す」的图式

此时「押しー」多表示具体动作的“按、压”义,如:

- (8) 親指で強く押して、だ腺細胞を押しつぶす。
(田中隆莊他『高等学校生物I』)

「押しつぶす」义为“压碎”。此外以下例子中「押しー」也表示“按、压”义:

- (9) a. ゴキブリを押し殺す<压死>
- b. 屋台が群衆に押し壊された<压坏>

在第2小节的分析中,我们得知「押す」的典型用法包含[+对他][+施力][+致使变化]的语义特征。仔细观察上述保留实质性动词语义的「押しー」,其后项均为引起对象发生位置变化或状态变化的有对他动词,复合动词表示通过「押す」这一手段致使该位置变化或状态变化得以实现。再看例(3)-(9)中的词,均可作如下解释。

- (3) 千円札を手に押しつける 千円札を押し
て →致使→ 千円札が手につく
- (4) 薬草を傷口に押しあてる 薬草を押し
て →致使→ 薬草が傷口にあたる
- (5) a. 綿を袋に押し詰める 綿を押し
て →致使→ 綿が袋に詰まる
- b. 引き入れにタオルを押し入れる
タオルを押し
て →致使→ タオルが引き
入れに入る

- c.銃に弾丸を押し込める 弾丸を押しして
→致使→ 弾丸が銃に入る
- (6) 扉を押しあける 扉を押しして →致使→
扉が開く
- (7) a.機体を押し上げる 機体を押しして →致使→
機体上がる
b.扉を押し開く 扉を押しして →致使→
扉が開く
c.人を押し倒す 人を押しして →致使→ 人
が倒れる
d.車を押し進める 車を押しして →致使
→ 車が進む
e.群衆を押し戻す 群衆を押しして →致使
→ 群衆が戻る
f.ボールを押し返す ボールを押しして →
致使→ ボールが返る
g.肘で人を押しおける 人を押しして →致使
→ 人が退く
h.人々を押し分ける 人々を押しして →致使
→ 人々が分かれる
i.洪水が芝生を押し流す 芝生を押しして
→致使→ 芝生が流れる
- (8) だ腺細胞を押しつぶす 細胞を押しして
→致使→ 細胞がつぶれる
- (9) a.ゴキブリを押し殺す ゴキブリを押し
して →致使→ ゴキブリが死ぬ
b.屋台が群衆に押し壊された 屋台を押し
して →致使→ 屋台が壊れる

可以说,当后项为表示致使变化的有对他动词时,复合动词前后项之间形成“手段(动作)+目的(变化)”的语义关系,这与「押す」原有的[+对他][+施力][+致使变化]等语义特征相贴合,故「押し」保留实质性动词语义。

3.2 复合动词整体语义抽象化的「押し」

当后项为表示致使变化且有对他动词时,常出现复合动词整体语义抽象化的现象,语义抽象化使得「押し」可能不再支配名词,如:

- (10)留男は、慌てて酒井をマンションの廊下へ押し出した。(清水一行『取締役解任』)
○留男は酒井をマンションの廊下へ押す
(「押し出す」表示具体义)
- (11)江間は机に向かって言葉を押し出し、踵を返した。(保科昌彦『ゲスト』)
? 江間は言葉を押す(「押し出す」表示抽象义)

那么应当如何看待这样的「押し」呢?从语义的引申方式来看,语义抽象化基于隐喻得以实现,因此「押し」与后项的结合在先、语义抽象化在后;从图式来看,此时的复合动词仍继承之前的语义图式,因此这一阶段的「押し」语义处于抽象化阶段,尚未虚化。

具体来说,首先,在「千円札を山下の手に押しつける」中,「押しつける」表示的是一个物理领域的具体义,随着语义抽象化,“塞到”义引申为心理领域的“强加于”义,如:

- (12)既得権にあぐらをかいて合理化もせずコスト引下げの意欲もなく、高い値段を消費者に押しつけるだけです。
(石川潤一『みんなの外国為替入門』)

「高い値段を消費者に押しつける」义为“把高价强加给消费者”,「押しつける」采用<动作主が対象を場所(相手)に>的语义结构,语义图式继承图8。此外,「(言葉に感情を)押し込める」「(姿を脳の深いところへ)押し込む」等可同等看待。

其次,在「車を押しすすめる」中,「押しすすめる」表示的是一个物理领域的具体义,随着语义抽象化,“推动(某物)”义引申为社会领域的“推动(某项事业)”义,如:

- (13)ケネディ大統領は積極的に宇宙計画を押しすすめ、60年代の終りまでに人類を月へ送り込もうと呼びかけた。
(槐一男『アメリカの歴史』)

由于(13)的「宇宙計画」为抽象名词,因此基于隐喻「押しすすめる」的语义由“推着前进”抽象化为“推进”,「押しすすめる」采用<動作主が対象を>的语义结构,语义图式继承69页图9。此外,「(知覚を)押し広げる」「(科学技術文明を)押し広める」「(新しい世界を)押し開く」「(反対を)押しのける」等可做相同解释。

再次,在「だ腺細胞を押しつぶす」中,「押しつぶす」表示的是一个物理领域的具体义,随着语义抽象化,“按压”义引申为心理领域的“压制”义,如:

(14)しかし、孤独を嘆いているだけでは、孤独に押しつぶされてしまいます。

(武田鏡村『「独楽」という生き方』)

「孤独に押しつぶされる」义为“被孤独压垮”,此时的“压”表示心理层面的力,但仍采用<動作主が対象を>的语义结构,语义图式继承69页图10。我们还在语料库中看到这样的表达:

(15)「う…うん」彼はやっと聞き取れるくらいの押しつぶしたような声で、確かにそう答えた。

(青木裕子『二度目の結婚物語』)

「押しつぶしたような声」指“压抑住的声音”,此处“压”兼有物理及心理层面的力,但由于「声」本身的不可视性及不可触性,「押しつぶす」仍可看作语义抽象化,“按压”义引申为心理领域的“压抑”义。再看以下两个例子:

(16)その彼が今私の目の前で泣いている。大きな背中を丸めて声を押し殺して何か訴えただ。

(水野麻里『プロの書き技』)

(17)インドシナ半島における失敗と悲劇を思い起こし、沈んだ気持ちを押し隠すのに懸命であった。

(三野正洋『ベトナム戦争アメリカはなぜ勝てなかったか』)

「声を押し殺す」义为“抑制声音”,「沈んだ

気持ちを押し隠す」义为“掩盖低落的情绪”。针对「押し殺す」和「押し隠す」,『学研国語大辞典』(学習研究社,1990)认为其中的「押しー」已经虚化为「接頭語」(“前缀”)。但实际上如上文所述,首先动词「押す」本身可表示“压制”“克服”等抽象义,其次复合动词「押しー」语义抽象化后也有“压抑”义,因此,将「押し殺す」和「押し隠す」中的「押しー」归为语义抽象化一类似乎更符合语言事实。

概括来说,复合动词整体语义抽象化时的「押しー」仍保留「押す」的[+对他][+施力][+致使变化]的语义特征,只是[+施力]由[+施具体力]引申为[+施抽象力]。因此这一阶段的「押しー」语义中“实”大于“虚”,「押しー」与「押す」的语义关联可归纳为下图11。

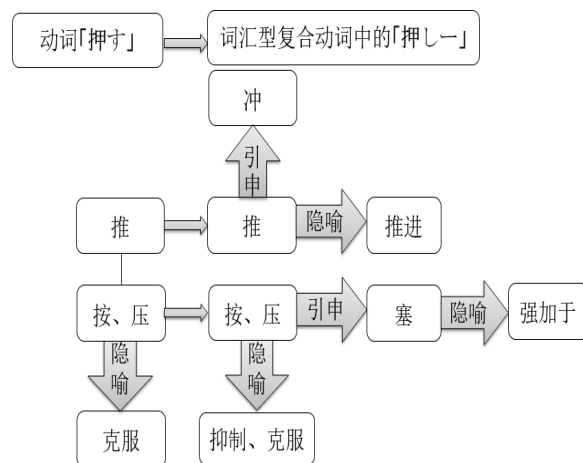


图11 「押しー」与「押す」的语义关联

3.3 语义虚化的「押しー」

如上所述,动词「押す」具备[+对他][+施力][+致使变化]的语义特征,如果复合动词整体语义与其贴合,「押しー」将保留实质性动词语义,否则「押しー」呈现出虚化的倾向。

比如当复合动词的后项是不表示致使变化的无对他动词时,复合动词的语义特征为[+对他][+施力][+致使变化],「押しー」语义虚化明显。如:

(18)ジャンは右足で床を押し踏み、腰を後ろに引いて、左膝とキッドの腋の下のあい

だに隙間を作る。

(ジャン・ジャック・マシャード『ブラジリアン柔術ブラックベルトテクニック』)

(19)この本を渡すと、じっと胸に押し抱いて、黙って頭を下げ、帰って行きました。

(赤川次郎『殺人を呼んだ本』)

(20)漠然とした、だが払いのけようもない大きな不安が、私を押し包んできた。

(安西篤子『安西篤子・山本道子・岩橋邦枝・木崎さと子』)

「床を押し踏む」义为“用力踩踏地板”，「押し抱く」义为“用力抱住”，动作主体为有生命物，「押しー」为后项添加“用力”“拼命”义；「私を押し包む」义为“紧紧将我包住”，动作主体为无生命物，「押しー」为后项「包む」添加“完全”义。可以认为，「押しー」虽语义虚化，但其[+施力]的语义特征仍在复合动词中得到一定程度的保留。

再如当复合动词后项是不表示作用的他动词时，复合动词的语义特征为[+对他][+施力][+致使变化]，「押しー」语义更为虚化。如：

(21)が、なんと言ってよいかわからず、珠世は包みを押し頂いた。(諸田玲子『お鳥見女房』)

「押し頂く」义为“恭敬地接受”，随着[+施力][+致使变化]等语义特征的消失，「押しー」语义进一步虚化，但虚化后的“恭敬”义由何而来尚有待考证。

当复合动词的后项是自动词时，复合动词的语义特征为[-对他][+施力][+致使变化]，「押しー」语义完全虚化。如：

(22)息を呑んで押し黙る。視線を落とし、何事か考え込む。(杉江久美子『COBALT(コバルト)』)

(23)暮れも押しつまった三十日、やっと記事が新聞に載った。(小原正雄『青春社会部記者』)

「押し黙る」义为“沉默不语”，动作主体为有生命物，「押しー」表示动作主体努力保持「黙る」这一状态；「(暮れが)押し詰まる」义为“年关在即”，动作主体为无生命物，「押しー」表示

后项的状态十分紧迫。虽然此时[+施力]的语义特征也已弱化，但[+施力]带来的压抑感、压迫感在很大程度上增添了复合动词的语义色彩和表达功能。

3.4 对「押し+表主体移动的自动词」的重新审视
在词汇性复合动词中，有一部分复合动词由「押しー」与表示主体移动的自动词组合而成，如：

(24)堀口ら一行は奉天に移り、九月二十五日に三試合が行なわれた。五〇〇〇人の観衆が押しかけた。(山本茂『ピストン堀口の風景』)

(25)花火の観衆がどっと押し寄せたら、自動車は立往生しなければならなかった。

(井上靖『あした来る人』)

(26)町に繰り出した兵士たちは商店に押し入り、手当たり次第に品物を掠奪した。

(星亮一『会津藩燃ゆ』)

「押しかける」「押し寄せる」义为“涌来、蜂拥而至”，「押し入る」义为“闯入”。大多数词典(如『学研国語大辞典』)将其中的「押しー」定义为「接頭語」(“前缀”)，杨晓敏(2009)在观察复合动词句法特征时也指出：「押しー」「取りー」等他动词和自动词后项结合组成自动词时，「押しー」「取りー」等的语义完全虚化。杨晓敏(2016)重新论证了「取りー」的虚化过程，刘霞(2016)也延续此观点探讨了「押しー」的虚化现象，认为虚化后的「押しー」为后项添加“势头强劲”“强硬”等语义色彩。

然而我们有必要重新审视此时「押しー」语义的虚实问题，因为与「取りー」不同的是，「押す」本身就存在自动词用法，如：

(27)この夜の中に門人たちが大勢高橋の道場へお祝いに押しして来た。(子母澤寛『逃げ水』)

(28)一挙に解決しようという気で、軍艦の砲口を突きつけて強引に押ししてくる。

(水野泰治『徳川慶喜』)

(27)中的「押ししてくる」义为“涌来”，与「大

勢」共现,表示移动主体人数众多;(28)中的「押してくる」“逼近”,与「強引に」共现,表示移动主体态度强硬。既然「押す」已有这样的用法,那么「押しかける」「押し寄せる」「押し入る」中的「押し」就显然不能认为是虚化,而恰恰是保留了「押す」作为自动词使用时的实质性语义。

这一点也可从核心图式角度加以证实。在(27)、(28)中「押す」的语义是动作主体、作用力、移动得到焦点化的结果,如图12所示。

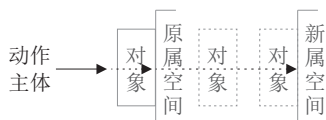


图12 动作主体、作用力、移动得到焦点化

动作主体和移动的焦点化产生主体移动义,作用力的焦点化产生大规模义或强行义。当「押し」与表主体移动的自动词结合时,复合动词也表示动作主体的移动,且常与「どっと」「とめどなく」「勢いよく」「次々と」「雪崩のように」以及「強盗に」「無理に」「強引に」「無理やり」等修饰语共现,呈现出与「押す」相同的图式。

该图式下的空间移动还可基于时空隐喻引申为时间的移动,这一用法也同时出现在单纯动词「押す」和复合动词中,如:

(29)時間が大分押してきますので、答弁は簡明で結構です。(『国会会議録』)

(30)必要のない部屋に寄り道していると、時間は押してくる。

(菅原智行『ガンサバイバー2バイオハザードコード:ベロニカ公式ガイドブック』)

这样看来,与其认为「押し」在语义虚化后为后项增添“势头强劲”“强硬”等语义色彩,不如说「押す」中已经出现自动词用法,而「押し」继承了这一自动词用法。这样的现象并不只出现在「押し」上,如:

(31)建物の入り口であつたろう部分に波が打

ち、藻が繁茂し、ガラスのない窓を行き来する魚が見える。(青山圭秀『最後の奇跡』)

(32)列車は海岸線をゆつたりと走り、すぐそばまで波が打ち寄せてくるかのようです。(吉沢久子『吉沢久子のおいしい和菓子みつけました』)

一般认为「波が打ち寄せる」中的「打ち」语义虚化,但如(31)所示,「打つ」本身就已演化出自动词用法,那么,「打ち」究竟是语义虚化还是对自动词用法的实义继承?将这样的复合动词前项定位为「接頭語」(“前缀”)是否过于简单粗暴?这或许还需要我们重新加以思考。

4 结 语

本文借助核心图式理论梳理了动词「押す」的主要用法,并在此基础上探讨了复合动词前项「押し」语义中的“虚”和“实”,认为:当后项为表示致使变化的有对他动词时,「押し」保留[+对他][+施力][+致使变化]的语义特征,保留实义;当后项为表示致使变化的有对他动词、但复合动词整体语义出现抽象化时,「押し」呈现[+对他][+施抽象力][+致使变化]的语义特征,实义大于虚义;当后项为不表示致使变化的无对他动词、不表示作用的他动词或自动词时,[+对他][+施力][+致使变化]的语义特征逐渐丧失,「押し」语义虚化;本论文最后重新审视了「押しかける」「押し寄せる」「押し入る」等复合动词中的「押し」,认为此时的「押し」继承动词「押す」作为自动词使用时的语义图式,并指出这样的复合动词构成要素是否属于“虚化”还值得重新思考。

正如赵元任(1979)指出:“意义的有无是个程度问题,语素的虚实也是个程度问题。因此,有些边缘性的例子,同一个语素或同一类语素可以看做实素,也可以看做虚素。”在观察复合动词构成要素的语义变化过程中,我们尤其感受到这个“虚实的程度问题”,比如「押し黙る」中的「押し」虽被归入虚化一类,但似乎跟「声を押しつぶす」中的「押し」也不无关联,语义抽象化与语义虚化

亦非泾渭分明。

此外,本文对前项的探讨只是一个初步的尝试,要明确语义的虚化过程,历时性的考察不可避免,这个课题将有待今后继续开展。

[本文为2016年国家社会科学基金后期资助项目《认知语义学视角下的日语复合动词研究》(批准号:16FYY020)。项目主持人:杨晓敏;2015年上海市哲学社会科学规划立项课题《中高级日语学习者词汇回避现象的实证研究》(批准号:2015EYY004)的阶段性研究成果。项目主持人:杨晓敏]

注

- [1] 杨晓敏.论日语复合动词前后项要素的基本特征[J].四川教育学院学报,2009(2):57.
 [2] 影山太郎.文法と語形成[M].東京:ひつじ書房,1993:102.
 [3] 小泉保,本田儿治,塚本秀樹,船城道雄,仁田義雄.日本語基本動詞用法辞典[M].東京:大修館書店,2000:93.
 [4] 森山新.日本語多義語学習辞典動詞編[M].東京:アルク,2012:99.

例句出处

以下例句引自『少納言 KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」』。

- (1):天童荒太『永遠の仔』; (2):中野美代子『契丹伝奇集』;
 (3):森瑤子『あなたに電話』; (4):坂東眞砂子『桃色浄土』;
 (6):倉世春『姫將軍と黄金の王子』; (8):田中隆莊他著『高等學校生物 I』;
 (10):清水一行『取締役解任』; (11):保科昌彦『ゲスト』;
 (12):石川潤一『みんなの外國爲替入門』; (13):槐一男『アメリカの歴史』;
 (14):武田鏡村『「獨樂」という生き方』; (15):青木裕子『二度目の結婚物語』;
 (16):水野蕨裏『プロの書き技』;
 (17):三野正洋『ベトナム戦争アメリカはなぜ勝てなかったか』;
 (18):ジャン・ジャック・マンシャード『ブラジリアン柔術ブラックベルトテクニック』;
 (19):赤川次郎『殺人を呼んだ本』;
 (20):安西篤子『安西篤子・山本道子・岩橋邦枝・木崎さと子』;
 (21):諸田玲子『お鳥見女房』; (22):杉江久美子『COBALT(コバルト)』;
 (23):小原正雄『青春社會部記者』; (24):山本茂『ビストン堀口の風景』;
 (26):星亮一『會津藩燃ゆ』; (27):子母澤寛『逃げ水』;
 (28):水野泰治『徳川慶喜』; (29):『國會會議録』;
 (30):菅原智行『ガンサバイバー2バイオハザードコード:ベロニカ公式ガイドブック』
 (31):青山圭秀『最後の奇跡』;
 (32):吉沢久子『吉沢久子のおいしい和菓子みつけました』;

以下例句引自《漢日對譯語料庫》(北京日本學研究中心,第一版)。

- (25):井上靖『あした来る人』。

参考文献

- 刘霞.复合动词“押し~”的多义性研究[D].湘潭:湘潭大学硕士论文,2016.
 杨晓敏.论复合词中“打ち”意义的变化[J].日语学习与研究,2008(3).
 杨晓敏.日本語複合動詞の多義性に関する研究[D].上海:上海外国语大学,2009.
 杨晓敏.复合动词前项「取り~」语义虚化的诸问题刍议[J].日语学习与研究,2016(6).

- 陈曦.关于日语复合动词的习得研究[M].北京:中国社会科学出版社,2008.
- 陈曦.日本語学習者における複合動詞の誤用分析:作文データベースを用いて[J].ことばの科学,2012(68).
- 赵元任.汉语口语语法[M].吕叔湘,译.北京:商务印书馆,1979.
- 玉岡賀津雄,初相娟.中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する要因[M].複合動詞研究の最先端-謎の解明に向けて[M].東京:ひつじ書店,2013.
- 石井正彦.現代複合動詞の語構造分析における一観点[J].日本語学,1983(2-8).
- 田中茂範.認知意味論:英語動詞の多義の構造[M].東京:三友社出版,1990.
- 由本陽子.語形成と語彙概念構造-日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について-言語と文化の諸相-奥田博之教授退官記念論文集-[C].東京:英宝社,1996.
- 寺村秀夫.日本語のシンタクスと意味第Ⅱ卷[M].東京:くろしお出版,1982.
- 村木新次郎.日本語動詞の諸相[M].東京:ひつじ書房,1991.
- 杉村泰.コーパスを利用した複合動詞「一渋る」の意味分析[J].ことばの科学,2008(21).
- 何志明.現代日本語における複合動詞の組み合わせ[M].東京:笠間書院,2010.
- 松本曜.日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ[J].言語研究,1998(114).
- 松田文子.日本語複合動詞の習得研究[M].東京:ひつじ書房,2004.
- 松田文子.コア図式を用いた複合動詞習得支援のための基礎研究-「とり」を事例として-[J].世界の日本語教育,2006(16).
- 国広哲弥.認知的多義論-現象素の提唱[J].言語研究,1994(106).
- 靱山洋介.認知意味論のしくみ[M].東京:研究社,2002.
- 姫野昌子.複合動詞の構造と意味用法[M].東京:ひつじ書房,1999.
- 森田良行.日本語の複合動詞について[J].講座日本語教育,1978(14).
- 影山太郎編.複合動詞研究の先端-謎の解明に向けて-[M].東京:ひつじ書房,2013.
- Brugman, C. The Story of over : polysemy, semantics, and the structure of the lexicon[M].New York: Garland, 1988.
- Lakoff, G. Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind[M].Chicago: University of Chicago Press, 1987.
- Langacker, R.W. Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar[M]. New York: Mouton de Gruyter, 1991.

作者简介:杨晓敏(1982—) 女 汉族 复旦大学外国语言文学学院讲师 研究方向:日语语言研究
联系方式:E-mail: yangxiaomin@fudan.edu.cn

A Study on the Semantic Uses and the Grammaticalization of the Compound Verb "osi-"

Abstract: Due to the insufficient description in previous studies, this paper reviews the semantic uses of the verb "osu" from the perspective of core schema theory, and discusses the semantic uses and the grammaticalization of "osi-". The main viewpoints are as follows: if the second verb of the compound verbs is a transitive verb that causes change, "osi-" retains its semantic features[+transitive][+force][+cause change]: if the semantics of the compound verbs are abstract, the semantic features of "osi-" are[+transitive][+abstract force][+cause change], therefore, "osi-" should still be seen as a content verb; if the second verb of the compound verbs is[-transitive][-force][-cause change], the grammaticalization of "osi-" is extremely obvious; in the structure of "osi+a intransitive verb that expresses movement", "osi-" inherits the semantic schema of "osu" which is used as an intransitive verb, therefore, whether such kind of elements belong to "grammaticalization" needs to be re-examined.

Keywords: osi-; semantic uses and grammaticalization; core schema; focus transformation

Author's Information:

Yang Xiaomin (Female) Year of Birth: 1982

Lecturer at Fudan University, China

Japanese Linguistics

E-mail: yangxiaomin@fudan.edu.cn

学术用语对照

语言学领域

日文	中文	英文
開音節	开音节	open syllable
解放(相)	除阻	release (phase)
核アクセント	语调重音	tonic accent
核音	音节核	nucleus
簡略表記	宽式标音	broad transcription
気音	送气	aspiration
気管	气管	trachea
聞こえ(度)	响度	sonority
基本母音	定位元音/正则元音/基本元音/标准元音	cardinal vowels
起伏式	起伏型	accented type
脚	音步	foot
強勢	重音/重读	stress
強勢アクセント	音强重音	stress accent
共鳴音	响音	sonorant
緊張母音	紧元音	tense vowel
軽音節	轻音节	light syllable
語アクセント	词重音	word accent
高母音	高元音	high vowel
口音	口腔音	oral
口蓋	腭	palate
口蓋垂	小舌	uvula
口蓋垂音	小舌音	uvular
口腔	口腔	oral cavity
硬口蓋	硬腭	hard palate
硬口蓋音	(硬)腭音	palatal
(硬)口蓋化	(硬)腭化	palatalization
語中音添加	增音	epenthesis
後舌	舌面后	back/postrodorsum
高低アクセント	音高重音	pitch accent
喉頭蓋	会厌	epiglottis
後部齒茎音	齿龈后音	postalveolar
国際音声記号(IPA)	国际音标	International Phonetic Alphabet

(待 续)

参考文献:

- 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹, 編. 明解言語学辞典[M]. 東京: 三省堂, 2015.
 赤野一郎ほか, 編. 最新 英語学・言語学用語辞典[M]. 東京: 開拓社, 2015.
 佐藤武義, 前田富祺, 編. 日本語大事典(上)(下)[M]. 東京: 朝倉書店, 2014.
 语言学名词审定委员会. 语言学名词[M]. 北京: 商务印书馆, 2011.
 语音学和音系学词典编译组, 译. 语音学和音系学词典[M]. 北京: 语文出版社, 2000.
 沈家煊, 译. 现代语言学辞典(第四版)[M]. 北京: 商务印书馆, 2000.

(资料整理: 南开大学 杨文江 王健宜)